

茨城県行方郡麻生町

クチツカ遺跡

調査報告書

1997年 3月

序 文

茨城県の南東に位置し、霞ヶ浦と北浦に囲まれた歴史と文化の薫り高い「水辺の里」麻生町。

わが町は、生活を営むうえで極めて良好な自然環境に恵まれ、古くから人々が住み文化が栄えました。このことは、先人の残した数多くの遺跡が物語っています。

麻生町は、これらの埋蔵文化財の保護と後世に継承する重要性をふまえ、その対応に努力しているところですが、近年における生活環境整備に伴う開発や造成等が増大しており、遺跡の現状維持保存は非常に厳しい状況となっています。

この度、麻生町大字小高字クチツカ 272 番地を中心として土採取工事が計画されました。文化財保護の立場から、遺跡を保存することを前提として協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることの理由により、やむなく発掘調査をして記録保存することになりました。

本調査を実施するにあたり、茨城県教育委員会、鹿行教育事務所の先生方のご指導のもとに、鹿行文化研究所・汀安衛氏を調査主任にして、「クチツカ遺跡発掘調査団」を発足させ、地元の方々の協力を得て、無事発掘調査を完了することができました。これもひとえに調査主任の汀先生をはじめ関係各位のご指導、ご協力の賜と深謝申し上げます。

さらに文化財保護に対し深いご理解のもと、発掘調査に係る一切の経費をご負担いただきました有限会社くりはら代表取締役栗原善一氏に対して、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、この報告書が一人でも多くの方々の目に触れ、郷土を知るうえに役立つことをご期待申し上げあいさつといたします。

平成 9 年 3 月

クチツカ遺跡発掘調査会

会長 橋本 豊 荣

(麻生町教育長)

例　　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町小高字クチツカ 272番地他の発掘調査報告書である。
1. 本遺跡の調査は、土砂採集による埋蔵文化財の調査である。
1. 本遺跡の現地調査は、平成8年11月20日～12月9日まで行ない、整理作業は平成8年12月15日～平成9年3月3日まで行なった。
1. 本遺跡の現地調査は、鹿行文化研究所の汀 安衛が担当し、整理作業は、戸島和子が図面・遺物実測、トレース・山本茜が遺物複元・佐々木トミ子が版組み、水洗い・注記を新関豊子がそれぞれを行い、汀が写真・執筆及び、総括して行なった。
1. 本報告書の縮尺は、遺構に関しては、 $\frac{1}{60}$ を基準とした。遺物は、 $\frac{1}{90}$ が基準である。水糸レベルは、統一表示としたが、不可能な場合はその図中に表示した。
1. 本調査にあたり次の方々の協力をいただいた、記して感謝の意を表したい。
横田泰隆、大川善久、根本武雄、高須松男、菅谷益尚、前田京子、山本 茜、戸島和子
佐々木トミ子、新関豊子、清宮 久、鈴木俊子、内田トヲ、内野たま、茂木ヨシ
茂木みつ子

目 次

序 文

I 位置と環境	1
II 調査に至る経過	1
III 調査経過	3
IV 調査の概要	4
1. 塚の測量について	4
2. トレンチとピット	4
3. 1号溝	7
4. 仮称小高塚について	8
V 総 括	11

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形及び位置図	2
第2図 トレンチ位置図及び全測図	5
第3図 横プラン想定図	6
第4図 南側ピット・トレンチ位置図	7
第5図 1号溝全測図	8
第6図 1号溝出土遺物実測図	9
第7図 仮称小高塚想定図	10
第8図 地形測量図及びトレンチ位置図	11

写 真 図 版 目 次

P L-1 確認調査のトレンチ（上），表土・立木伐採後（下）	
P L-2 表土除去全景（上），南側から北側を望む（下）	
P L-3 東側の下部（上），中央部の地山を切るトレンチ（下）	
P L-4 円形状部の表土除去後（上），同，地山を掘り切るトレンチ（下）	
P L-5 ピットと溝の検出状態（上），同，全景（下）	
P L-6 P-1・2・3・4・7・9各ピットの形態（南側）	
P L-7 P-2・3・4・7・8・9各ピット（北側）	
P L-8 須恵器出土状態（下），出土遺物	

I 位置と環境（第1図）

本遺跡は、茨城県行方郡麻生町小高字クチツカ272番地に所在し、町立運動公園の西北側500m程に位置し、行方台地が半島上に伸びる先端部、国道339号線の東側の標高25m程の台地上に占地している。眼下には水田地帯と、その先には満々と水をたたえる霞ヶ浦が広がる。北西側には筑波山をはじめとする山々を遠望する。好天の日には、遠かに日光連山、西南には富士山を望む事ができる景勝の地である。

このようなすぐれた自然環境に位置を占め、天然の要衝を見る事が出来、地形、立地を占める。近くには仮称「小高砦」が所在し、現在は皇徳寺墓地としてその姿を変えて当時の様姿を想像する事はかなり困難な状態にある。

その他、周辺には於下貝塚、城ノ内貝塚、公事塚古墳群等が散在し、古代より生活環境に恵まれた地域であった事が理解出来る。墓地東側には、小高氏の菩提寺皇徳寺が所在している。以上の様な恵まれた地理的、自然環境の中に占地する。

II 調査に至る経過

今回おこなわれた調査は、皇徳寺の南側に位置した新発見の遺跡である。調査に至る経過については、下記のとおりである。

平成8年5月23日

御くりはらさんより、埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて照会があった。

平成8年5月28日

茨城県鹿行教育事務所埋蔵文化財保護指導員大沼信夫氏に所在確認調査を依頼した結果、古墳らしい部分が確認された。

平成8年6月7日

文化財保護審議会に諮詢した結果、埋蔵文化財の可能性があるものは、現状保存が望ましいが、工事計画が変更できない場合は、発掘調査が必要との答申を得る。

平成8年5月31日

御くりはらさんへ回答。

平成8年8月29日

御くりはらさんと、文化財保護の立場で協議を行ったが、計画変更は不可能とのことで、やむなく発掘調査を行うことが確認された。

平成8年9月10日～12日

確認調査を行い、調査実施の基礎資料を得た。

平成8年9月18日

予備調査報告及び発掘調査打合せを行う。

平成8年11月19日



第1図 遺跡周辺地形及び位置図

麻生町教育委員会教育長橋本豊榮を会長とするクチツカ遺跡発掘調査会が発足し、鹿行文化研究所汀安衛氏を調査主任とする発掘調査団が結成され、平成8年11月20日から同年12月9日の期間で調査が実施された。

III 調 査 経 過

本遺跡は、前述のとおり「クチツカ」の字名が示す様にツカ「塚」が所在していたと理解される。現地踏査の結果、前方後円墳状の形態の塚が確認され予備調査としてトレンチを設定し確認した。その結果、今日まで登録されていなかった塚と判明した。以下予備調査をふまえ本調査を実施した。調査経過を日記から抜粋し後述したい。

調 査 日 誌

- 9月10日 トレンチを入れ予備調査を行い人口の盛土であることを確認、その後測量調査を行なう。
- 9月11日 前日に続いてトレンチを設定し盛土層、規模、プランを確認し2日間で終了する。
～12日
- 11月20日 予備調査、後円部状部分に3ヶ所トレンチを入れる。盛土は10～20cm前後。
- 11月21日 前方部状に3ヶ所トレンチを入れる。2日間の予備調査の結果地山を削り砂質状粘土層を10～30cm前後盛土を行なっている事が判明した。
- 11月28日 本日より本調査を開始、地形図を作成図面上は前方後円形状を示すが大部分は前回の予備調査で判明しているため古墳の可能性は少ない。
- 11月22日 トレンチの延長、表土層を除去、旧表土、盛土中に遺構の掘り込みの存在を認める。小穴を1/2づつ調査、いずれも浅く当初の目くろみがはずれる。
- 11月24日 小穴の土層、トレンチ土層の作成、写真撮影。
- 11月28日 小穴は横状とも認められるが明確ではない。円墳状の部分は大半地山であり上部には10～20cmの盛土のみで古墳→前方後円墳は存在しない。
- 11月29日 前方部もトレンチ土層から古墳は無い。写真、図面作成後盛土部分を除去する。
- 12月2日 盛土層除去後、溝が一条検出され、調査を開始する。その他、地山を掘り込み、地山層の確認を進める。東西→南北共に。
- 12月3日 1号溝より須恵器長頸瓶出土、砂壙、壊された状態で散在し底部から検出。後で復元しほぼ完形に近く成了。
- 12月4日 全測図作成、周辺部の凹地状部分を全周調査、南北、東西のトレンチを貫通。
- 12月5日 本日で作業を終了。道具、テントのかたづけ後近くで昼食を全員でとり解散する。
- 以上の通り本調査の結果、古墳、塚ではない事が判明した。遺構の性格づけが問題であるが、一応近くの墓地（皇徳寺）が以前は館もしくは砦の可能性があるため、この砦の物見台？の可能性が強いと推察した。平成9年2月9日現地を踏査、図面作成。

IV 調査の概要

1 塚の測量について（第8図）

本塚は、調査前に25cmセンターで測量調査を実施した。センターの状況からは前方後円墳状形態と思われた。前方部と推察する部分の幅は南側に向かって狭くなり50cmが一周し、高低差が差程ない。中央部及び東側に若干の高低差が見られる程度で特別な変化はない。体的に不規則な平坦部と円形状が意識的に作られた、様相である。

後円部と思われた部分は50cm程は円形状を呈するが下部は方形状に変化し、その後は自然地形状に変化し流れる。変形な6角形に移行し測量図からは可能性は少ない。確認調査の段階でも盛土層は10~15cm前後しか確認出来なかったため、この線からも否定される。

以上のような調査結果をふまえ、本塚は（仮称小高砦）の物見台的塚の可能性と推察し調査を行なった。クツカの名称の根源は不明である。近くに公事塚古墳が存在していた。

調査は、立木の伐採、表土層の除去、トレンチの設定、柱穴状ピットの確認と調査を進めた。その結果盛土層は前述通り10cm前後の砂質状の灰白色層が上部に盛られており南側の平坦部では10cm程で平均化して盛土層が認められた。北側、円形状部分では10cm程の盛土で南側同様に認められ、その境目は直線的に認められ完全に分かれた。北側、南側と分けて、以下調査の概要について述べていきたい。

2 トレンチとピット（第2図、3図、4図）

トレンチは東西、南北の他に南側に2本、北側に2本を設定し塚の形状の把握に努めた。南北のトレンチは中央部に食い違いになる様に設定し地山と盛土層の関係を捕えるべく努力した。北側は、ほぼ完全な地山層の地ぶくれを若干の盛土層で円形状に整形し上部に小穴が7ヶ所ほど検出された。

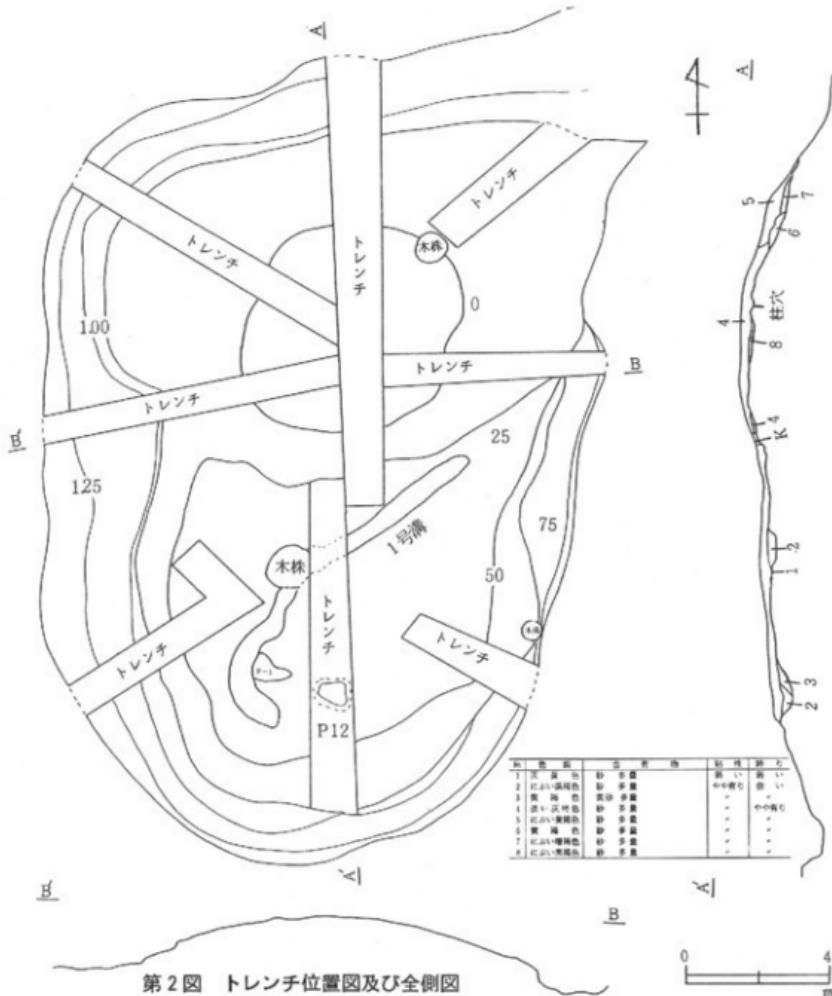
南側では不規則なピットが11ヶ所認められたがいずれも柱穴状の穴とは程遠い掘り込みであり円形状の浅いものであった。10~15cmの砂質層盛土の下からは大形のピットP12、多量の灰、焼土をもつ半円形状のP1、黒褐色の覆土をもつ1号溝が検出されている。

トレンチから塚の形成状態を観察すれば自然の地ぶくれ状部分の小丘を櫛部を鋭角的にカットし塚を造り出し砂質層を盛土に用いて成形している。高さは円形状部分で3.5m程の高さをもうけ南側は2~2.5m程で平坦部を造り出している。下部はかなり締りの良い地山層で堅い。

北側からは浅いながら第3図に示すような遺構が推定される。プランは長方形状で東西1.4m、南北1.7m程の櫛状の遺構が推定されるピットが認められた。いずれも長円形状でP1は東西26cm、南北30cmで深さは10cm前後。P2は東西20cm、南北23cm、深さ8cm前後である。P3は、東

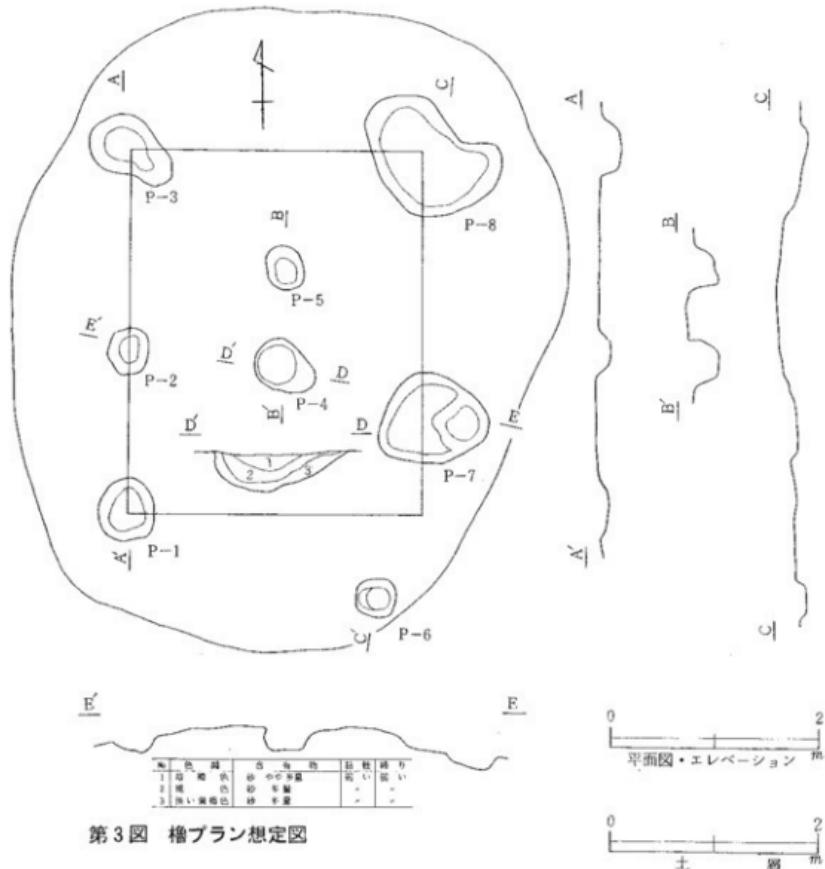
西35cm、南北30cmで深さは10cm前後。他のP 4～P 8も同様なもので「檜」の高さは2～3m前後の規模しか推定できない。いずれも地山層で止まり、これを掘り込むことはない。

南側ではかなり深いピットも認められるが、いずれも盛土層の下部に掘り込みが認められている。これらから柵列状、もしくは小屋状の存在は推定できるが檜の存在は推定できない。ピット

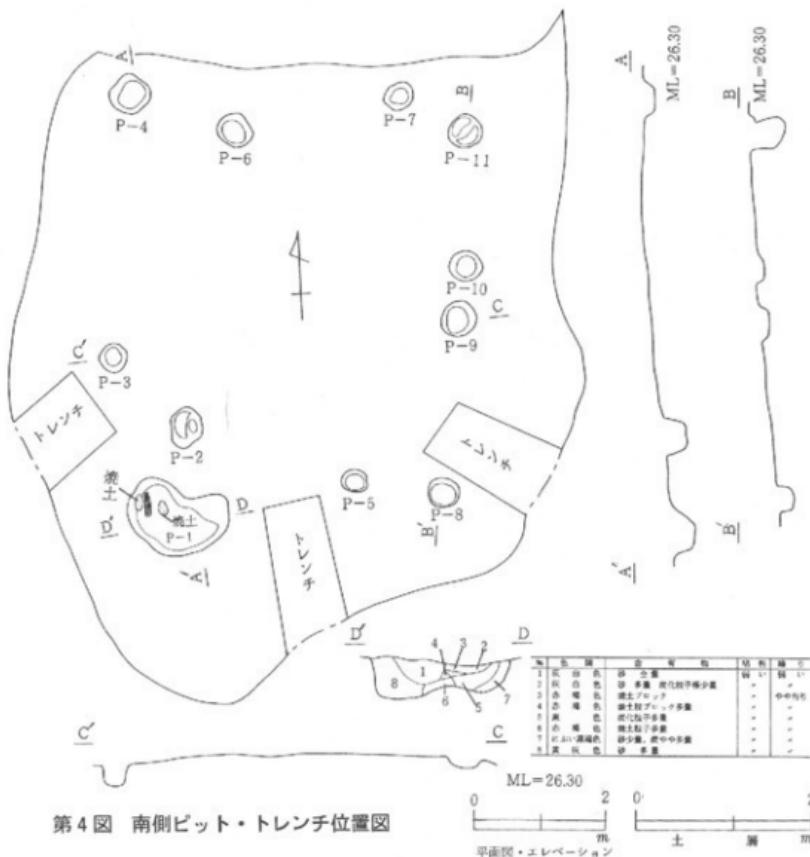


第2図 トレンチ位置図及び全側図

の配列が不規則で径が15~20cm前後で樁を構築する柱は建たない。P-1は大形であるが不整形で焼土、炭化材を含み、他のピットから比べ大形であり、炉に近いものである。東側のトレンチ内から検出されたピットも同様で、これは盛土層の下位から検出されているため1号溝同様、時代が本塚と時間的に差が認められる。これら的小穴からは柵列、小屋の存在以外は推定出来ない。東側にP-8~P-11までほぼ直線状に掘り込まれている北側ではやや不規則なピット列となり不可能、南側では角度的にやや不完全なピットの配列であり前述の通り小屋、柵列のみしか認定出来ない。炭化材をもつピットは、想像をたくましくすれば狼煙の痕跡と推定される。小穴は開い？小屋の痕跡？。



第3図 樁プラン想定図



第4図 南側ピット・トレンチ位置図

3 1号溝（第2図、5図、6図）

本溝は、南側の中央部から弱い「く」の字状に屈曲して旧表土層から掘り込まれていた溝で長さ11m50cm、南側ではトレンチ近くまでみられP 1の一部を掘り込む。中央部では椎の大木の下部に入り調査不能で、この部分からやや東へ向きを変えている。幅は50~80cmで深さは、15~30cmでいずれも、どこの部分でも盛土層の下から検出されており、覆土層は3層で1層は盛土層の砂層、2層は暗褐色、3層は茶褐色で砂を多量に含む。いずれも粘性、繊りは弱い。東側からは須恵器の破片が40片程出土し復元の結果、灰袖をもつ長頸瓶が復元された。いずれも投げこまれて壊れた状態の出土であり、何らかの儀礼？の存在が推定される。その他、碗状の土器などが出

土している。

第6図の1は、須恵器長頸瓶で復元により底部は上底、径8.5cm、胴径18.5cm、高さは推定27cm前後を計る。やや小型のもので肩部はかなり張りロクロ水引で頸部と胴部を別々に作り接合している。口縁部は欠失しているため不明であるがやや外反すると思われる。肩部には灰袖が認められる。2は碗に近い土師器で、安定した平底から内湾して立ち上がり、口唇部は器内を減じ外反して尖る。国分期の碗、器形を呈する。3.4は、碗と蓋でいずれも陶器。5は、小型の管状土鍾で長さ3cm程度中央に小孔をもつ。6は、何とも肯定出来ない「石」で石器とも思われる。緑泥岩である。

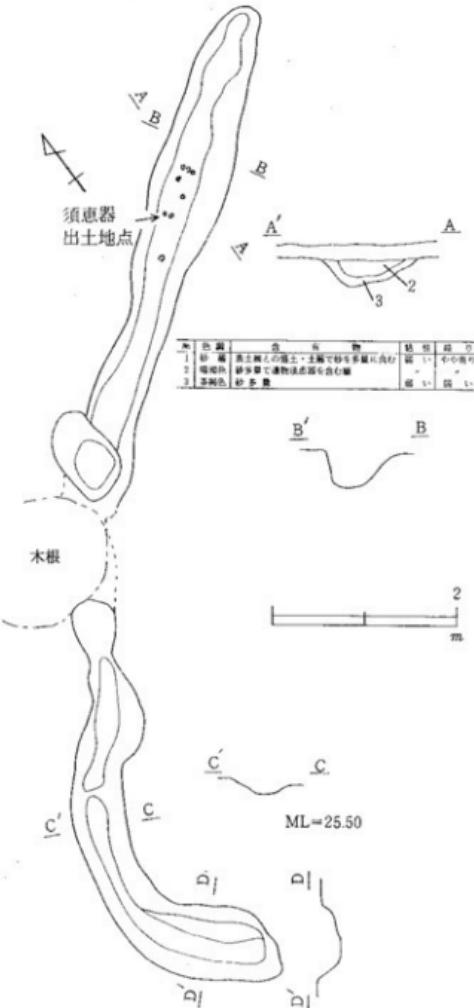
遺物から見る限り本溝は奈良時代末から平安時代初頭の遺構と推定出来る。

4 仮称・小高砦について (第7図)

本遺構は、現在皇徳寺の墓地となって往時のおもかげを残す所、部分は僅かであるが、墓地を踏査した結果、以前の小砦の跡が認められる。

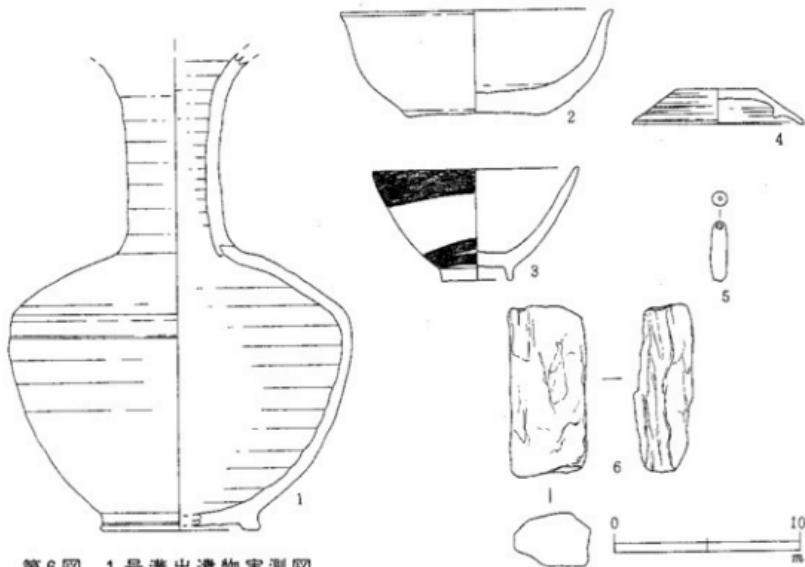
よって仮称「小高砦」とし、その概要を述べ「クチツカ」の位置、性格の一端に触れて見たい。

本砦は、皇徳寺西側の墓地全体を利用した砦である。第7図に示すように最も北側の高所にI曲輪をもち(標高35m)方形状プランで四方にそれぞれ人工の堀がめぐる。堀の形態はかなり古



第5図 1号溝全側図

い様姿を残す「V」字状形態で一部は埋められて旧状を推定する根据は残る。復元するのにやや困難な部分もある。I曲輪から南側に向かって堀り切りがあり、これに対しカギ状の高所が存在し、3方を堀に囲まれている。西側は5m程下のテラス部分まで鋭角に下る。帶曲輪は、II曲輪



第6図 1号溝出遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(m)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	長頸瓶 須恵器	A - B - C 8.5	ロクロ成形痕を残す。肩部はやや下り気味。最大径を胴上部に置く。底部は僅かに上底。口縁部欠失。灰袖をもつ。	ロクロ水挽き 口頭部、胴部を成形後接合 良い	長石、極少量 青緑灰色	一部欠失 1号溝底 部欠
2	碗 土器	A 7.5 B 5.6 C 7.7	大半を欠失する。底部上底気味で直立的に立ち上がり口唇部尖り外反する。底部は器肉は厚い。	ロクロ水挽き ナデ	細石、長石、砂、 黄赤褐色 やや不良	約1/2欠失
3	碗 陶磁器	A 11.2 B 6.0 C 3.8	輪で近世のこ飯茶碗に利用か。本造構とは若干時代差をもつ。	ロクロ水挽き	精選 白色 良好	大半を欠失
4	碗 陶磁器	A 4.3 B 1.9 C 9.3	お茶のフタ？ 砂糖壺？。内側に明瞭なカエリをもつ。陶磁器。	ロクロ水挽き	精選 茶褐色 良	約1/3部欠失

土製品・石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
5	管状土器	3.2	0.8	0.2	0.5	土製	覆土中	一部欠失するが、ほぼ完形、小孔をもつ
6	石器？	9.0	4.2	2.9	180	綠泥岩	覆土中	石器とも思われるも予明

下からⅢの曲輪まで幅3~4mで直線的に伸びて居る。Ⅲの曲輪は、Ⅱの曲輪との間にやや幅広の堀り切りをもち東側に20m程の高台をもち最も広い面積を有する曲輪で長さ25m、幅15mの長方形形状で南側に長く伸びる。東側下端には2段にテラス、幅曲輪がめぐる。この部分に搦め手が存在したか？虎口になるのか…。その他南端部には2段に分かれる小テラスが存在する。下端は現在道路として利用され、この部分が堀り切り部分か？以上踏査によって観察し得た事を述べてみた。小さくとも本砦は3ヶ所前後に分けられ小腰曲輪をもった遺跡、砦跡と推定される。

これらから判断して「クチツカ」は本砦の見張台もしくは櫓台の跡と推察され、それ以前は、奈良時代の溝が掘り込まれた遺構が存在していた遺跡が存在したと理解される。

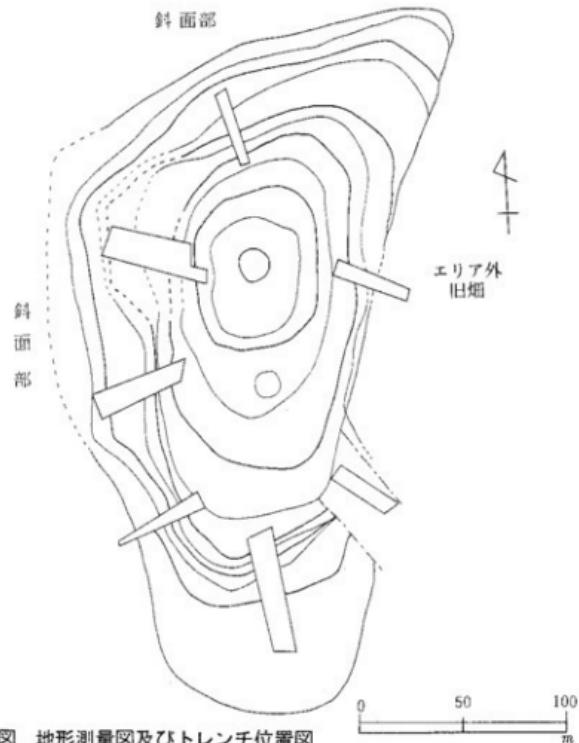


第7図 仮称小高砦跡想定図

V 総 括

クチツカ遺跡は、名称の通り一応地山を削り出した塚状遺構と理解したい。地ぶくれ状の地山をカットし若干の10~20cmの砂質土を盛土し整形し前方後円墳状の塚を築き小高台の物見台、橋台?として利用したと推察される。物見台は円形状部分の北側に建てたと思われる。南側の平らな部分には小屋を建てたか、柵を設けたと推定される。

盛土下から検出された1号溝の中からは奈良時代前後にあたる須恵器長頸瓶が出土している。これは塚を構築する以前に存在していた遺跡と理解される。確認の為に入れたトレンチ断面で観察すれば大半の土層は地山層であり、この中からは人工遺物は検出出来なかった。その他宗教関係の遺物は認められずあくまでも塚、見張台として利用したと考える。



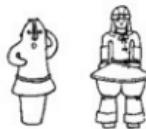
第8図 地形測量図及びトレンチ位置図



確認調査のトレンチ（上）



表土、立木伐採後（下）





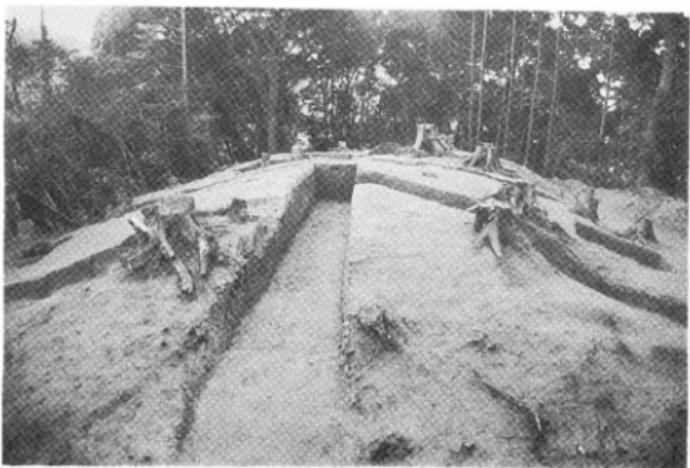
表土除去全景（上）



南側から北側を望む（下）



東側の下部（上）



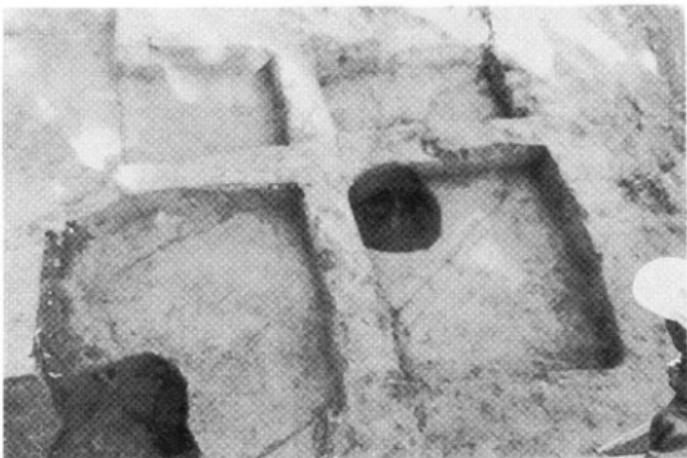
中央部の地山を切るトレンチ（下）



円形状部分の表土除去後（上）



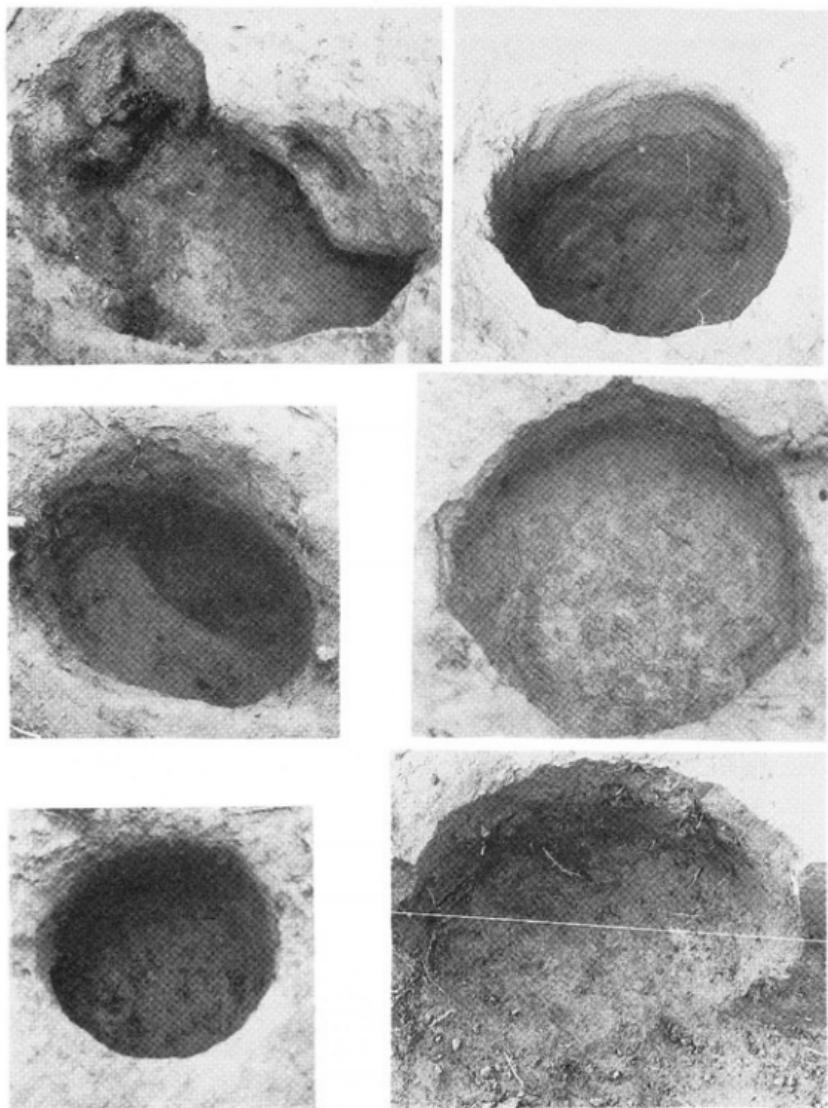
同、地山を堀り切るトレンチ（下）



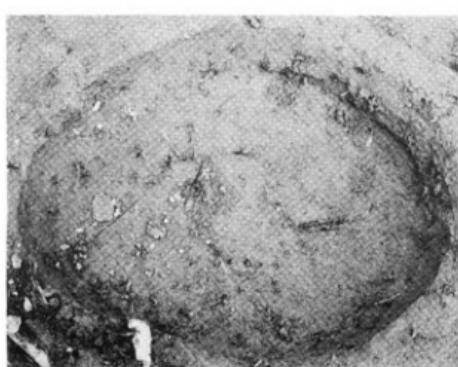
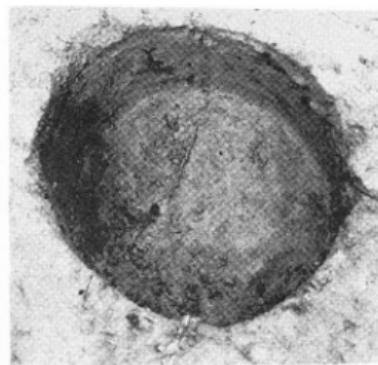
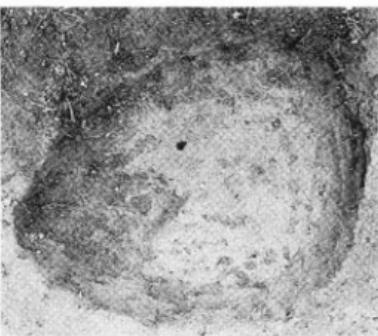
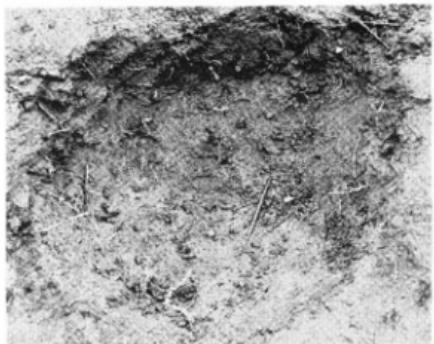
ピットと溝の検出状態（上）



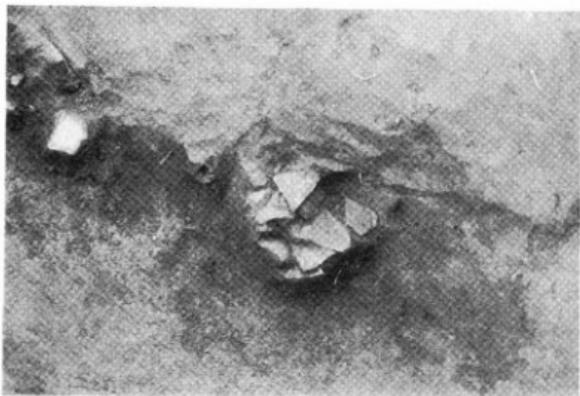
同全景



各ピットの形態（南側）



各ピット(北側)



須惠器出土状態（下） 出土遺物

クチツカ遺跡
調査報告書

発行日 平成9年3月20日
発行所 麻生町教育委員会